

人の世の波に身を寄せ

—聞き書き『蘇東坡自伝』—

茅々斎かちかち 著

## 第1回 フー・イズ・トーパー？

2016年6月12日（日）。

コツコツとたたく音にはっと顔をあげると、窓にイノ君の顔があった。もう午後3時になったのだ。

にっとほほえむイノ君に、

「あっちー！」

と、指でかるく示すと、こくりとうなずいた。

これはいつもの決まりで、最初から普通に玄関から入ってくれば早いはずなのに、わざわざこのようにするのがイノ君特有のこだわりだ。

私はコーヒーを淹れる作業にとりかかった。豆をぎりぎりひくところから始めるのは、私にもそれなりにこだわりがあるのだろう。

イノ君が窓をたたくのはぴったり午後3時と決まっている。たぶん窓の下にしゃがんで時計を見て待っているのだ。

平均すると1カ月に1回くらいだろうか。私もイノ君も勤務でなく、家に私しかいなくて、海によい波がなくて、そのほか何かしらの条件が揃った日にイノ君はやってきて、コーヒーを飲みながら小一時間ほど話す。それで気持ちが悪く落ち着くらしい。いい波があればサーフィンが優先で、そちらの方が効果が大きいのだろう。今日はきそうだというのはだいたいわかる。電話やメールの予告はない。

話といつても特にどうということはない。仕事に関連したばやきみたいなものあれば、この日は例の都知事が辞める前だったから、湯気の立つコーヒーをちや

ぶ台に置きつつ、

「これで知事を辞めたら死んでも死にきれないとかいってららしいですけど、あのさもしい見は、たぶん、死んでも直らないですよね」

当の知事が実際には死ぬこともなく辞めたいまとなっては、何のことやらわからなくなった話題だ。

「みみっちゃんにもほどがあるよなあ。漫画くらい、自分のおカネで買えばいいじゃんって、だれだっついていいなくなるよ。そんなもんをケチる根性で、知事なんかされたらこつちが死にきれないよ。まあ、ボクは都民じゃないからいいけどさ。」

どうせごまかすのなら、でっかく5億と10億とか、そのくらいの単位でやってほしいよなあ。24億円だか横領して女に貢いだ年金関係の野郎がどっかにいたけど、そいつに完全に負けてんじゃないか」

私の前ではイノ君はいつもこんな口調だ。わざとこうすることで何かのバランスを取っているのだろう。

イノ君は私の姪だ。干支えとがイノシシで、確かに猪突猛進的などころがあるので、幼いころに「イノ」とあだ名を付けたのが、私との間だけでいまもそのままになっている。

「それと比べるのはどうかと思いますけど」

私は、パソコンで作業中だったワードのファイルを保存してから、コーヒーをすすった。イノ君は座椅子に大あぐらでふんぞり返り、私はいわゆる体育ずわりだ。互いにそれが楽なだけなのだが、はたから見たら、真黒に日焼けして体格のいいイノ君の隣に、白髪交じりの痩せたおっさんがちんまりしゃがんでいる構図は少しばかりおかしいのかも知れない。

「ホントにホントに一流で、一流の仕事をしてんのならスイートルームに泊まったっていいと思うよ。ちまちまさもしいのがいやなんだよ。どうせなら、豪快に、

10の壺に金貨がぎっしりってなことで世間をあつといわせてほしいよなあ」

「10の壺に金貨？ なんのことですか？ 誰かがそんな隠し財産を持つてるって、『週刊文春』とかに出てました？」

「叔父さん、知らないかなあ。『どうかわが国には攻めてこないようにしてくださいませまし』ってんで、そんなだけの賄賂を大國の宰相様に贈ったんだって」

妙にすましたイノ君の表情に、私は少し警戒した。イノ君は時々妙な法螺話をする。近所の老舗旅館にAKBの全メンバーが泊まって大騒ぎだったとか、海辺の結婚式場で新婦を乗せてバージンロードをゾウが歩いたとか、たいていは一瞬でウソだとわかる。コーヒー1杯でもタダで飲ませてもらっては悪いと思うの

か、そんな話を用意してくるのだ。

「おカネで戦争を避けられるのだったら悪くないですよ。金貨というのは、絶海の孤島の名もない国の証明書付きだったりします?」

「ちげえよ。これは昔むかしの話。だから、金貨っていうより金塊かな。宰相様はたんまりもらったばかりの壺を屋敷の廊下にずらっと並べてニヤニヤ眺めていたんだって。そしたら、そこにいきなり皇帝がやってきて……」

「そいつは、まずそうですね」

「宰相様はおおあわてで皇帝を出迎え、皇帝の鋭い視線から壺をなんとか隠そうとしたんだけど、『あれは、なんじゃ』ってことになっちゃったんだ」

「へーえ、それはそれは」

「宰相様は開き直って、『かの国から海産物を頂戴しました』と答えたんだと。海

産物だって賄賂には違いないけど、それくらいなら許されるかもってことだね。『ほう、左様か。かの国のものなら、上質の結構なものであるう。ちと、見せてみよ』。皇帝の命令だからどうしようもない。この前の知事みたいに、冷や汗をばたばた落としながら、宰相様は壺のふたを開けたんだと。そしたら、まばゆいばかりの光がさーっと出てきたんで、『ほっほう、かの国ではかようなものが海から獲れるのであるか。壺は10個、すべて同じあるか。なるほど、なるほど。かの国の連中も、我が国が今日あるのは君がいてこそと知るから、これだけの結構なものを買ってきたのであろう。それが買いかぶりではなく真実であることを、今後とも君が証明してくれるのなら、この倍の数の壺をわしから贈ってやつてもよいが、どうだ』と、皇帝はひどく上機嫌だったというんだけど、国の政治に携わるような人間はそれくらい度量がでかくないとダメだってことらしいよ」



「へーえ。それって、どこの皇帝の話ですか？ ハプスブルク家とかブルボン家？」

「叔父さんだったら知ってると思っただけだなあ。大昔の中国の皇帝らしいよ」  
イノ君はいたずらっぽく目をくりつと動かした。

昔の中国と言われて、私はあわてて頭の中でグーグル検索をかけ、

「えーと、もしかしたら、宋そうの時代に趙普ちようぷとかいう宰相さうせいがいて、そのようなエピソードがあったような……違ちがいましたか？」

「やっぱし、叔父さんって、詳しいんじゃない。さっすがあ」

「イノ君の方こそ、よく知ってますね」

「ボクは知っちゃいないけど、ついこの前、トーバー君から聞いたばかりなんだ。トーバー君はさすがにこういうことには詳しいから。あたりまえだけどね」

「へーえ。トーバー君っていうのは？」

「いいところときどき呑むんだ。いつもの〇〇で。もうこれで4、5回くらいになるかなあ」

「〇〇っていうと、駅の南口を出て少し行ったところの、炭で魚とか貝とかを焼いて食べさせるところだったですよね」

ひよんなことから店に迷惑がかかっていけないので〇〇の名は伏せておく。

イノ君は数年前にそこでアルバイトをしていた。確かイノ君の5番目の職場だ。私も一度だけ行った。

「あいかわらず繁昌してるよ。トーパー君は、あれで大した人らしいんだけど、なんか〇〇が気に入ったみたいで、なぜかボクのことも気に入ったみたいなんだ」  
「へーえ。イノ君のことを気に入ったって、もしかして、いい感じの仲になったってこと？ ふーん」

「ちげえよ。そんなことあるわけないじゃん。だいたいトバー君といい感じって、どういうこと？ 笑っちゃうよ」

「えーと、トバー君っていうのは、誰でしたっけ？」

「叔父さんならよく知ってると思うんだけどなあ」

「そうっですかあ？ どの人？」

「どこの人かっていったら、叔父さんとかこのあのチャチなホームページはさあ、『中国歴史小説のなんたら』とかかっていうんだったよね。中国の歴史とかに詳しくそうなるふりしたって、トバー君を知らなきやモグリだっってえのがバレバレになっちゃうよ」

「中国関係の人？ 歴史家？」

「だからいったよね、あれで大した人らしいって。トバー君って超有名人みた

いだよ。ボクは中国の歴史には1000パー興味なしだから、ぜんぜん知らなかったけどね」

「さっぱりわからないんですけど」

「中国の歴史で超有名人っていったら、さんごくし三國志の諸葛孔明しよかつこうめいとかならゲームでボクでも知ってんだけど、そのレベルに近い人らしいよ」

「話が見えないのですが……歴史上の人物ってことなのでしょうか？」

「そう、そう」

イノ君がニヤニヤし出したので、これはいよいよ法螺話であるに違いないと、それを前提に付き合うことにした。

イノ君は感受性が鋭く、心を疲れさせてしまう傾向がある。私を相手に法螺話をぶつのは、たぶん何かのバランスをとるためであったりするのだろう。

「それでしたら、語呂合わせでいうと、トーバー君とはもしかして蘇東坡のこと  
だったりますか？」

「そう、そう、蘇東坡、蘇東坡。さすが叔父さん、大当たり！」  
イノ君は得意げににたりとした。

「だけど、蘇東坡っていう人はですよ、たしか900年くらい前に死んでいるの  
ですから、いくらなんでも〇〇にはこないと思うんですけど」

「そうなんだよね、900年なんだよなあ。どういふことかわかんないけど、ト  
ーバー君がいうには、若くして亡くなったお姉さんにボクがどっか似てるんだっ  
て。同じイノシン年でさ。だから、そのお姉さんとボクとはつまり、12×79  
年離れているんだよね。計算できる？ 900年以上はあるでしょ」

「トーバー君って人がそんなことをいうのですか？ なんかあやしくはないですか。

お姉さんに似ているとかいって油断させて、ヘンに接近しようっていういやらしい作戦だったりするのではないですか？」

「ちげえよ。こんなボクに接近してどうしようっていうの？ ヤツはすげえじいさんなんだよ。ボクより12×79マイナス1歳も上なんだもんな。お姉さんは1個上だっていうから」

「蘇東坡の年齢ならそういうことになるのでしょうか、トーパー君っていう人は、なにかしら下心があつて妙なことをいってだまそうとしているのではないですか。ほら、新たな詐欺かも……」

「だますたつてさ、『おれっち、900年も前に死んだ蘇東坡でござんす』とかいわれて、どこにだまされるアホがいる？ いないでしょう。サギならもつともらしくやるでしょうに。だから本物つてことじゃんか」

「わけのわかんない理屈ですね。で、百歩譲ってですよ、蘇東坡は仙人になったという説もあつたりなかつたりするから、そういうことですか？ トーバー君つていうのはどんな格好で〇〇にくるのですか？」

私はトーバー君なる人の存在そのものを疑っていたが、一応イノ君の話に合わせるようにした。

「ながーいヒゲを伸ばして、節くれだった杖とかついで、もさつとした浴衣の兄貴分みたいなのをひっかけて、いかにも『仙人でござんす』つてな格好でこられたらさ、目立っちゃってしょうがないよなあ。いっくらボクでも、そんなヤツと呑むのは恥ずかしいよ。すぐにスマホで撮影されて、『仙人発見！』とか、ネットに動画なんか投稿されちゃったりするかもね。だからごくふつうの格好だよ。たいていは、上下ともによれよれのきつたねえスウェットで、ビーサンっつけて

ペタペタやってくるよ。大昔はヒゲが自慢だったらしいけど、いまはただの無精ヒゲで、脳天気口笛なんか吹きながら、いかにもそこのむさいおっさんでござんすって感じだよ」

「へーえ、蘇東坡がむさいおっさんですか。蘇東坡っていうのは偉大な人なので、すから、イメージがぜんぜん違いますよ」

「900年もたてば、イメージなんかがらっと変わるよ」

「で、口笛って、どんな曲？」

「そうだなあ、耳になじみのあるところかというと、トンリーチュンかりーシヤンランか、たまにはチャンメイリンってこともあるかな」

「それって、何ですか？ えーと、蘇東坡だけに、宋の時代に流行った詞の題かなんかですか？」





が真実だとの証明になるよね。そうは思わない？」

「その理屈はよくわかりませんが。そういえば、蘇東坡っていう人は音痴だったっていう説があるみたいですから、そのトーパー君はどうなのですか？ やっぱり調子っぱずれだったりしますか？」

「それ、それ。その噂は本人も少しは気にしてるみたいだよ。噂のものは、曲につけたトーパー君の歌詞が音律とうまく合っていないかったりすることなんだろうけどさ、それはつまり、どっちを重視するかの問題なんだよなあ。音楽性か文学性か。もちろんトーパー君は文学性だ。詩としての完成度を重視すれば、音律からはずれるくらいはあるよ。音痴とはまるで関係のない話なんだよ」

「ほっほう、こいつは驚きました。イノ君が蘇東坡にそこまで詳しいとは……」

「なんか誤解してない？ ボクは蘇東坡なんかはまるっきり知らないよ。ただト

「バー君と〇〇で呑んで、話を聞いてるだけだよ」

確かに蘇東坡についての知識がイノ君にあるとは考えにくい。イノ君が生まれてから30年以上の付き合いになるが、かつて一度だってイノ君の口から蘇東坡の名が出たことはない。そもそも昔の中国に関心を示したこともない。10年余り前に、イノ君が大学でイギリスの詩を勉強していたときに、私が英詩と漢詩のいいかげんな比較論をぶって漢詩に関心を向けさせようとしてみたのだが、イノ君はぜんぜん話に乗ってこなかった。

そんなイノ君であるのに、今日は急にどうして蘇東坡を持ち出して法螺話をするののか。まさかトバー君なる人物が実在しているとは思えないので、何かしらわけをさぐろうと、いくつか聞いてみた。

「ふーん。で、トバー君っていうのは、お酒をたくさん呑むのですか？」

「そうだね、酒は好きなんだろうけど、たぶん強くはないんだろうな。ボクの半分の半分も呑んでないと思うよ。サーフィン焼けでまつ黒だから、あんまり目立たないけど、割とあかくなる方かもね」

「えっ、サーフィンをやっているのですか？」

蘇東坡は少量の酒しか呑まないというのは史実に合致する。

「そうだよ、もとはといえば、サーフィンで知り合った友達なもの」

「へーえ、蘇東坡がサーフィン？ どう考えてもありえないですけど」

「だから真実なんだよ」

「で、トーパー君はどこに住んでいるのですか？ サーフィンやるからにはこのあたりのアパートかなんかですか？」

「住まいまでは知らない。そこまでプライバシーに踏み込んだらウザいよね。仙

人なら、たぶん山からくるんじゃないのかなあ。小出山脈こいでかはたまた峨眉山がびさんかつてなところだろうね」

「よくその二つを並べますね。小出山脈なんて最高地点が50メートルあるかどうかですよ。仙人の隠れ住むところなんかないでしょうに。峨眉山は蘇東坡の故郷の山で、昔から仙人がたくさんいたらしいですけどね。それで、サーフィンやっていることからすると、トバー君は、見た感じで、それなりに若かったりするのですか？」

「見かけは若いよ。900歳を超えてるようにはとても見えないもん。いまどきのサーファーは結構年食ってんのが多かったりするから、トバー君も板持って浜辺にいればそれなりの感じってところだね。つまり、叔父さんよりも少し上の団塊の世代くらいってところじゃないかな」

「ふーん、そうですか？ 蘇東坡が死んだのはたぶん65、6とかでしたから、見かけはそのときのままってことですかねえ。で、なんでサーフィンなんかやっているのでしょうか？」

「好きだからに決まってるじゃん。ボクだってそうなもの。サーフィンに限らず、体を動かすのが好きみたいだよ。妙なストレッチ法とかも教えてくれたりするもの」

「蘇東坡っていうのはそういうキャラでしたかねえ」

「なんでも、その昔筏に乗って東の海に浮かびたいって思いがあったらしいよ。浮世のしがらみでそれができなかつたから、せめていまになってサーフボードで湘南の波に興じてるってことなんだろうね。70近くにもなってくると、青春を取りもどしたいって思ったりするのって、団塊の世代によくいたりするじゃん。

ボクらからすると、いい気なもんだって感じがするけどさ」

「ふーん。昔の中国人にとって、東の海ってというのは、仙人の住む蓬萊島ほうらいとうとかがあつて、ある種あこがれのところだったつてことはあつたようですけどね。で、

〇〇ではよく食べたりますのですか?」

「食欲は実に旺盛だね。ばくばく食つて、べらべらしゃべつて、口の休む間なんかまるつきりなしなんだ。でもね、本人はあまり食べないつてよくいうんだよなあ。本人曰く『健康には何よりも粗食いかわが大切』だつてさ。『ソシヨクだけに粗食なんちゃつて』つて、くだらなすぎるよね」

「それつて、ひよつとして、蘇東坡の本名の蘇軾そしやくにひっかけて駄洒落? それを本人がいうの?」

「やつぱ団塊の世代のオヤジと同じレベルつてこともね。だけど、ただの笑え

ないおやじギャクではなくて、いっぱしの講釈も一応は付いているんだ。何回も聞かされたからすっかり覚えちゃった。粗食は三つを養う、三つの『養』があるってえのがヤツの言い分なんだ。つまり『三養』だ。叔父さん、三養のなかみを聞きたい？」

「ここまでかなり調子よく法螺話を展開してきて、これまでで特に出来のいい方だろう。この先どこまで続けられるのかという興味で、」

「もちろん、ぜひ教えてほしいですね」

「トーパー君つてもしかしてダイエット教の元祖かもね。トーパー君曰く、『分に安んずるは福を養い、胃を寛くするは気を養い、費を省くは財を養う』って、この三つが『三養』なんだ。意味わかる？ わからないといわれても、ボクは講釈できないけどね。そんなでもって、ボクと〇〇で呑むときは『費を省くは財を養う』



の実践だってんで、いっつもボクがおごってんだ」

「年上のじいさん相手に、イノ君がおごっているのですか？」

「叔父さん、信用してないね。〇〇には顔がきくから、少しはオマケしてくれるんだ。それでもって割り勘とかにしたらカッコ悪いじゃん」

「でも、イノ君がいつも2人分払うのはさすがに大変ではないですかね」

イノ君と私はとびきり給与水準が低いことで知られる業界で働いている。私が10年以上非常勤職員として勤めている介護施設に、イノ君は8番目の職場としてやってきて、最近正社員になったところだ。イノ君の給料で年上のおっさんを毎回おごるといふのは不自然すぎて、その点だけからしてもトバー君の実在性ははなはだ疑わしい。

「ボクはふだんはあまりおカネを使わないから、〇〇で呑んで食うくらいなら楽

勝で払えるさ」

「それはまあいいとして、トーパー君には食べる好みがありますか？」

「そうだなあ、よく注文するのは、イカの一夜干し、ホタテバター、鯛のかぶと、  
かるーくたたみいわしをあぶるのも好きかも」

トンボローウ  
「東坡肉は？」

「〇〇は中華料理屋じゃないよ」

「あっちの国のものを一緒に食べに行ったりはしないのですか？」

「あっちのものかどうかはあやしいけど、ラーメンだったら一緒に行くこともあるよ。そうそう、そんなもって、最初にラーメン食ったときなんだけど、もう驚  
いちゃったんだ」

「どうかしましたか？」

「最初のころは〇〇を出ると、あっさり右と左に別れていたんだ。3回目か4回目かに、『シメはやっぱりラーメンではないでしょうか』って、トバー君が小声でぼそつとつぶやいたんだよね。そんなときに、ボクはカンがいいから、ははーん、これはひよつとすると、いつももの足りない思いで帰っていたんじゃないのかって。せつかくおごってやって、もの足りない思いをさせていたんでは恥だよな。』よしっ、食いに行こうじゃん』ってんで、思いついたのが、例の、鯛の骨だかでスープを取るのが自慢の店。叔父さんとも行ったよね。そこへ連れて行こうってんで、夜の街をふらふら歩いたんだけど、だいぶ酔っていたんだろうなあ、なんか道がわかんなくなっちゃって、妙な路地に入りこんじゃったんだ」

「どうして？　〇〇からそのラーメンだったら、広い道を歩くだけで、信号を2回も曲がれば着くでしょうに」

「路地をふらふら行くとね、一番奥に、ぼんやりあかりがともって、『味自慢 ラーメン』ってかすれた文字がガラス戸に浮かんでいたんだ。『ほっほう、ああいうところが知られざる穴場かも知れません』って、トーパー君がずんずん行くもんだから、ボクも後にくつついてき、ガタガタってトーパー君が戸を開けて、中を見てもう驚いちゃったよ」

「どうしましたか？」

「だいたいガタガタって開けるってえのがヘンでしょ。いまどき建てつけの悪いガラス戸の店なんてないもんね。とにかくぼろいんだ。そんなもって、中はおっそろしく狭くて、きつたねえのなんのって、ひと目でぞっとしちまったよ。天井から40Wくらいのしょぼい裸電球がぶらさがっててき、LEDの時代にだよ。うす暗いからまだましで、あれでコウコウと照らされていたら、惨状があらわす

ぎただろうね。あっちこっちに上から黒い尻尾のようなものがぶらさがっていてさ、何かと思つてよく見たら、叔父さんなら知つてんよね、ハエ取り紙なんだ。いまでもあんなもんがまだあるんだよなあ」

「この前、どっかの百貨で見ましたよ」

「それにハエがいっぱいについて真黒になってんだ。壁には油が伝つて流れた筋がたくさんあつて、床には黒ずんだ割り箸が散乱していて、妙な臭いもして、すぐに戸を閉めて帰っちゃいたかったんだけど、トバー君はずいっと入つて、5人もすわれば満員のカウンターの前の丸椅子にどっかと思つて腰かけちゃったんだ。その丸椅子つてえのが、油で煮しめたんじゃないかと思うくらいの黒光りするきつたねえしろもので、トバー君はきつたないスウェットだからいいんだろうけど、ボクは高級ブランドのユニクロのチノパンだから、人差し指で丸椅子にそつ

と触れてみて、まあ、べたべたするわけでもなさそうだったから、おそろおそろすわったんだ。そしたら、頭の上で『ラーメンっすか？』って超マヌケな声がしたんで、もう驚いちちゃったよ」

「よく驚きますね」

「だって、店に入ったときには誰もいなかったんだよ。それが、いつどっから湧いてきたんだか、ヌーボーつとしたねずみ男そっくりのオヤジが、でっかい図体で裸電球の下に突っ立ってんだよ。うす暗い電球で照らされているからホント不気味で、『いらっしやいませ』とかなしで、いかにも面倒くさそうに『ラーメンっすか？』ってきたから、むかつとして、『ラーメンじゃなかったら、ほかになんかあんの？』って聞いてやったんだよ。そしたら、『うちはラーメン専門店っすよ。うどんはありましえんよ。そばはありましえんよ。スパゲッティはありましえん

よ、ハンバーガーはありましえんよ』って、ないものを10に20も並べようとするもんだから、『なんでもいいからラーメン二つ。早くして』って行ってやったんだ。そしたら、『早くつていわれましても、うちはれっきとしたラーメン専門店っすから、カップ麺の自動販売じゃありませしえんから、3分間ではできませんよ』っていうんだよ。もう、あつたまきて、『つべこべいわずに、ラーメン二つ！』って、ぴしつと行ってやったんだ。こっちは酔ってんから、かなりの大声でね。

でもねずみ男の野郎にはぜんぜん響かなくて、もさーっとしたまんま、やることがいちいちマヌケで、手垢で曇ったきつたねえガラスのコップにジャーっと水道の水を入れたのをカウンターにドスンと置いてから、マッチでガスに火をつけ、のろのろ湯をわかしたりなんかして、もうさんざん待たされちまったんだ。あらかた酔いもさめようかというころになってやっと出てきたラーメンなるものを見

て、これはもうホントに驚いちゃったんだ」

「また驚いたのですか？」

「だって、『うどんはありましえん』といってたくせに、どんぶりの中にあるのは、極太のうどんも裸足で逃げようかってしろものなんだから。あれで麺の直径は2、3センチはあったかもね」

「そんなのがありますかね」

「ありもしないもんが出てきたから驚いたんだよ。たとえば、不二家ふじやの千歳飴をふやかして2倍に太らせたっていうようなやつだよ。見ただけ、もうげんなりげんちゃんですよ。で、仕方なく、千歳飴の方は箸で横の方にどいてもらって、つゆを飲んでみたのよ。口に入れた瞬間に、もうイスからころげ落ちそうになったよ。からいとかしよっぱいとかっていうのはあるけど、にがずっぱいんだ。」



わかる？ 苦くて酸っぱいってというのはどういふのかって。あまりのひどさに気が遠くなったけど、ねずみ男なんぞに負けてなるものか、こうなったらこのひどさを街中に吹聴してやろう、そのためにはひと口は食べなければと、極太千歳飴のはしっこを一本箸につまんで、にゆるにゆる引っ張り出して、口に入れようとしてみたんだ。とにかくふってえだろう、口をいっばいいっばいにかけてやっと通るかどうかで、もう窒息するかと思つたよ。その上、齒に触れたとたんべちやつとひつついてきて、まさにねとねとにとけた千歳飴そのものなんだ。めっちゃ気色悪いから、ベロはそいつを絶対に入れまいと押し出そうとして、意志の力で無理やり入れようとして、その葛藤たるや、言語に絶するっていうのはこのことだ」

「そんなに大層なものですか？」

「不退転の決意で、目を白黒させてなんとかかんとかのどを通して、後は食道から胃へと自動的に送られて行ったんだけど、胃に落ちた瞬間に冷や汗がどつと出てきて、それを袖でぬぐいながら、ふっと横を見たら、いやあもうこれはホントにホントに驚いたちゃったよ」

「何回も驚きますね」

「心底驚いたのなんのって、だって、隣のトーパー君ときたら、もう全部たいらげちゃって、なんとも涼しい顔をしてるんだよ。ツユさえ残ってないじゃん。ボクはヤツのどんぶりを指差したまま、驚きのあまりものもいえずにいると、ヤツはボクのどんぶりをのぞいて、『あなたはそのしろものがよほど気に入ったのですか。いつまでもゆっくり味わっていたいのですね』って。『はあっ？』って思ったけど、2、3秒で意味がわかって、それで2人でカウンターをたたいて大笑

いして、さっとお金を払って店を出ただけ、あれは『飲湿いんじつの法』っていうんだってね。叔父さんなら、知ってるよね」

そう言われて、急いで脳内グーグルに合わせて脳内ヤフーも検索したのだが、半分しかわからなかった。

「もしかすると、たぶんいまの話は、蘇東坡が弟とひどくまずいうどんのようなもの、湯餅タンピンを食べたときのエピソードと似ているようですけど。弟があまりのまずさにぐずぐずもてあましている、蘇東坡はとくにぺろりと平らげてしまったという少しばかり有名な話です」

「へーえ、弟とそんなことがあったんだ」

「ですが、『飲湿の法』っていうのはわかりません」

「ほら、蘇東坡があやうく死刑になりそうになって、どっかだかの町に追っ払わ

れたことがあったよね」

「ワウシヤウ黄州のことですか？」

「地名は忘れたけど、たぶんそうかも。ボクには職を転々とした経験があるよね、だから、なんか共通するところがあつたりすると思つてくれるのか、そこに流されたときのことをよく話してくれるんだ。その町で、トーパー君には一応はお役人の肩書はあつただけけれど、犯罪人扱いだから銭がなかつたんだって。それでひどくまずい安酒しか手に入れられなかつたんだけど、そんなもんでも、水を飲むようにつるつる喉を通してしまえば、まずい味に気付く前に腹に落して酔うことが出来るっていうのを発見したんだって。それが『飲湿の法』なんだ」

「へーえ、イノ君はよくそんなことまで知ってますねえ」

私は大いに感心してみせた。これだけ凝った法螺話はかつてなかった。イノ君

のこだわりがなぜか理由はわからないけれど、今回はここに振り向けられたのだらうか。

「だから、ボクは別に知っちゃあいないんだってば。トバー君から聞いたただよ」

「なんだか、トバー君っていうのが、本当にいるみたいですね」

「叔父さん、もしかして疑ってんの。いるに決まってるでしょうに。じゃなきや、蘇東坡のことなんかボクは生涯何一つ知らずにいたんだから」

「まあ、それはそうですね。イノ君にこんな話を作れるとは思いくいですが、トバー君っていう人がいるってことにはなるんでしょうけど、だけど、900年以上も前に死んだ蘇東坡を名乗るっていうのは、どういうことですかねえ？」

「本人なんだから、名乗って構わないんじゃないん。マイナンバーカードを提示しないダメとかって言うの？」

「そういうことではないんですけど。なんかあやしいから」

「あやしいくらいがおもしろくていいんじゃないの。それでね、トーパー君の話って、ボクがひとりで聞くんではもったいないなあってよく思ったりするんだ。

風変わりだけど、なんか含蓄があって、ちよつとあつたかみもあつてね。それで、いま急に思いついたんだけど、トーパー君の話をいいとこ取りでうまくアレンジして、叔父さんとこのあのチャチなホームページにでも載せたら、こいつはおもしろいかもってんで、アクセス数がひよつとして2桁を超えたりなんかするんじゃないのかなあ。これって、いい考えだと思わない？」

イノ君の話の意図がようやくよく見えてきたと思つた。私とその気になったら、「う

っそぴょん！」とかいって、笑って帰ろうというのだろう。

「でも、私にだってつきあいでクリックしてくれる友人の1人や2人はいるのですから、いくらなんでも2桁に届かないっていうことはないのですけど」

「いっておくけど、1人や2人の中にボクを入れてもらっては困まるよ」

「そりゃ、わかってますよ。イノ君はここんところネットとか全然使ってないですよね。昔は得意だった時期もあったのに」

イノ君の2番目の職場はネット関係で、こだわりが昂じて心身に不調をきたして辞めたのだった。それで、ときどき禁ネットを宣言することがあるのだが、さほど長続きしない。

「自己防衛のためには、なるたけネットから遮断された空間に身を置くのがいいんだよ。ボクって、叔父さんが思っている通りに、たぶん馬鹿なんだよね。すぐ

にむかつとするし、ヘンなことにこだわるし、フツーに人と話すのが苦手だし、それで何度か仕事も辞めてるんだもの。その場をテキストにおさめるテキストなことがいえるくらい利口だったらいいんだろうけどさ。スマホなんか使って、SNSとかやったりして、これ以上むかついたりしたらどうしようもないって、ボクを見てて叔父さんも思うよね。だって、よくいうでしょう、『ネットサーファー、板子一枚下は瞋恚しんいの地獄』って」

「はああ、それは何ですか？ どつかのことわざ？ 聞いたことないですけど。だいたいネットサーフィンって言葉、いまも使う人がいますかね。古い流行語を使うととってもナウくなるからやめた方がいいですよ」

「人間がひどく古いんだから仕方ないよ。トーパー君がそんなことをつぶやいていたんだよ。昨日だったか、10年前だったか、100年前だったか憶えちゃい



ないけど」

「へーえ。まあ、『しんじ暎恵の地獄』っていうのは、当たらなくもないのかも」

「トバー君って、いろんなことを知ってるよ。文学とか芸術にも詳しいし、政治談議だってよくするよ。ネタはいっぱいあるから、叔父さんとこのチャチなホームページに載せたら、ホントにいいと思うよ。肝心なのはコンテンツだもんね。

つまらないものをいっくらたくさん並べてたってダメなんだよ。誰も見てくれないでしょう。トバー君はいいと思うよ。何しろ超有名人なんだから」

「私はまるつきり無名ですし、コンテンツはつまらないものしかないのはイノ君にいわれなくてもわかってますけど。それが実力だもの、仕方ないですよ」

「あのね、そんなふうに肩を落としてみせなくていいから。叔父さんの実力はボクにはわからないけど、とにかく、何かしら人を引き寄せるようなものが必要な

んだと思うよ」

「本物の蘇東坡ならすごいことですけどね。だけど、そのトーパー君がイノ君に向かつてしゃべったことを、勝手にホームページに載せたりするのはちよつとまづかったりするんじゃないですか？」

「著作権っていうのを気にしたりしているってこと？」

「まあ、そういうこと……」

「TPPとかで著作権の期間を延ばそうって議論があるみたいだけど、さすがに死後900年まで長くしようっていうのはないよ。だから、著作権上の問題はゼロ。それに、トーパー君はボクには『一飯』いっばんどころではない『何飯もの恩』があったりするんだから、文句はいわせないさ」

「じゃあ、そこまでせっかくイノ君が言ってくれているのですから、載せさせて

もらってもいいですけど、もう少し詳しくトバー君の話を聞かせてもらえますかね。いまのラーメンのエピソードくらいですと、どうやって載せたらいいのかわからないので。まとまった感じで話してくれるといいんですけど」

「そうだよ。では、ここで一発、トバー君のホントにおもしろいところを聞いてもらおうか……」

イノ君はぐいと身構え、しかし、そのまましばらく固まってしまった。

それを見て、ここらあたりまでは準備してきたけれど、さすがに限界なのだろうと、心の内でニヤニヤしながら待っていると、イノ君はふっと力を抜いて、

「しかし、いざ、まとまった話をしようとする、簡単ではないかもね。だって、呑んで食つての話だから、そんなときにはおもしろえと思つても、翌日になると、半分は消えてしまつて、3日もしたらほとんど忘れてしまうもんね」

「そう？　じゃあ、思い出せるところからテキストに話してくれるのでも構わないですよ。順不同でも断片的でも、後でうまくアレンジしますから」

「でも、さつきボクはいったよね。馬鹿だからテキストっていうのができないって。正確に話を再現しなくてはいけないって、どうしたって思ってしまうもの。

それに、いい加減なことをしたらトーパー君に悪いもんね。ボクが不正確に話して、それを叔父さんがいい加減にアレンジしたら、伝言ゲームじゃないけど、どうしたってメチャクチャ不正確になってしまうもの。ボクはそんなことはしたくない」

「私はアレンジはしても、いい加減にするとは限らないと思いますよ。一応はその筋の仕事をしたことだってあるのですから。じゃあ、正確さにあくまでもこだわるのでしたら、そのトーパー君っていう人の話を録音してきてくれたらいいの

ではないでしょうか。本人が話した通りを載せたら文句ないでしょうから」

コーヒーはもうとつくに飲み終わっていて、いつもならイノ君はそろそろ帰るタイミングで、私ももとの作業に戻りたくもあった。今回の法螺話はここらが潮時と思えた。トーバー君は実在していないだろうから録音などはなからできないし、たとえ実在しても録音したものをホームページに載せるといわれたらビビるに違いない。

「録音かあ。叔父さんもナマの声を聞いてみたかったりするよね」

「そりや、まあね。蘇東坡の声は聞いてみたいですね。日本語でしゃべるのですか？」

「あつたりまえじゃん。中国語なんかボクは知らないもの。トーバー君は仙人だからだと思っけど、日本語でしゃべるくらいなんでもないんだ」

「なら、声だけでなく、会えたらもつといいかも」

「叔父さんど？ それは難しいと思うなあ。トーパー君は人見知りだから。〇〇でもいつもすみっこの人目につかない席と決まっているし」

「ん？ 人見知り？ サーフインで知り合ったんですよね？ もともと蘇東坡という人はすごぶる社交的だったらいいですけど」

「えーと、だったら、俗気に触れたくないってことかも。何しろ仙人なんだから」  
ここでイノ君はついに逃げを打ってきたと思った。

「俗気に触れたくなくて、どうして〇〇で呑むのですか？ あそこは決して品のいい店ではないと思いますけど」

「要するにですね、ボクはトーパー君に選ばれた特別な存在ってことで、900年の時空を超えて話ができているんだよ。亡きお姉さんに似ているんだから」

「じゃあ、私は会わなくていいですから、とにかく録音してくれたらいいですよ」  
「しかし、残念なことに、ボクは録音する道具を持ってないんだ。ほら、スマホじゃなくてガラケーだし」

「ICレコーダーならそこにあるから、貸してあげますよ」

「あつ、そうなんだ、ICレコーダーがあるんだ。ふーん」

私はICレコーダーをイノ君の目の前に押し付けるようにして置いた。

「じゃあ、それは貸してもらって、録音できるかどうかやってみつかないかな。それで、どうせだったら、叔父さんが興味ありそうなことを聞いてきてあげてもいいよ。何か聞きたいことがある？」

「そうですねえ。でも、私はトバー君のことを知らないのです、どういうことを話題にしたらいいのかわからないから、テキストでいいですよ」

「だから、ボクはテキストっていうのができないんだってば。きちんと希望をいってくれないと録音なんかできません！」

イノ君はICレコーダーを指で押しもどした。

「だったら、考えますよ。ホームページに載せるには、ある程度は筋道だったものの方がいいですよ。蘇東坡はとにかく大昔の人なので、どんな時代をどんなふうに生きたのかっていうのが、われわれ素人にもわかるように、順を追って話してもらえたらいいのかも知れませんよね」

「順を追ってっていうと、新聞にある『私の履歴書』とか『わが道』とかかって感じに、『我が生涯を語る』って……」

「そう、そう、そういうこと。イノ君も、出版社でアルバイトしていたときに、確かそんな仕事を手伝ってましたよね」



「あつた、あつた。自費出版で、自伝風のを、何冊か社長が作ってたけど。割ともうかる仕事だったみたい」

「だから、そのときの要領で、トバー君とかいう人に話を聞いてみたらいいのではないだろうか」

「でも、ボクは社長にいわれたことをしてただけで、話を聞き出したりしたわけではないんだけどなあ」

「思い出話っていうのはたいがいの方は好きですし、蘇東坡はもともと話好きなので、水を向ければ、あとは勝手に話してくれると思いますよ」

「でも、ぐらぐら自慢話みたいなことをされても困るなよなあ。社長もぼやいていたもの、本人だけいい気になって話してくれても、ちつともおもしろくないって」

「蘇東坡なら、愚にも付かない自慢話はしないとしますよ」

「まあ、そうだろうね」

「とにかく、1回、試してみて」

思案顔のイノ君の方にもう一度ICレコーダーを押しやった。

「ボクが言い出したことだから、まあ、そういうことでやってみっかな」

「ああ、そうしてみてください。楽しみに待ってますから」

イノ君はICレコーダーをつかむとすぐに立ちあがり、そそくさと帰って行った。

法螺話してはかなりよくできてはいたけれど、終わらせ方としてはたぶんこんなところなのだろう。何日か間を置いて、何かしら言い訳を用意して、ICレコーダーをそのまま返しにくることになるだろうと、イノ君を見送りながら私は思

った。

しかし、その一方で、法螺話の次なる展開を期待するほのかな思いもなくはなかった。イノ君はどのような意図でトバー君なる人物をでっちあげたのかはよくわからないものの、聞いていて結構楽しめた。実際に私のホームページは低調であるから、私を発奮させようとしてくれているのかも知れない。

私には、数年前に蘇東坡を小説に描こうとして失敗した経験があった。それは黄州に流されてきた蘇東坡を、町の人々の目を通して描いてみようとしたものだった。

蘇軾は静かに、

「かたじけなくも我がためにお上かみが黄州をお選びくださった訳がよくわかりまし

た」

ほうさんし

方山子は身を乗り出し、

「まことに左様です。天下に何百何千とある町から、ここ一つをお上がお選び下さったのです。もちろん、お上はこの面々を御存知ではありません。しかし、黄州が貴殿をお迎えできるのは、この面々がいるからに他ならないのです」

方山子は豪快に笑い、

「では、この英雄豪傑たちを御紹介いたしましょう」

黄州の町の人々が順に蘇東坡に紹介される場面まで書いて、その先に進めなくなつた。蘇東坡が偉大すぎることに怖気づいてしまったのだろう。

この失敗をイノ君に話した覚えはない。

いまの仕事を勧めたのもそうだが、いつもは叔父としてイノ君を支えているつもりでいるのだが、イノ君としてはたまには逆をしてみたい気もあるのだろう。

さすがに録音はないとしても、私のために何かしてくれようとしているのなら、「楽しみに待ってますよ」と言った言葉通りに待つべきだろう。だとしたら、強引にICレコーダーを押しつけたのは意地が悪かったと反省させられた。